

修験道の聖地

—出羽三山の歴史と文化—



いでは文化記念館 山崎 安奈

はじめに

出羽三山は山形県のほぼ中央にそびえる三つの山、羽黒山（414m）・月山（1,984m）・湯殿山（1,500m）の総称です。

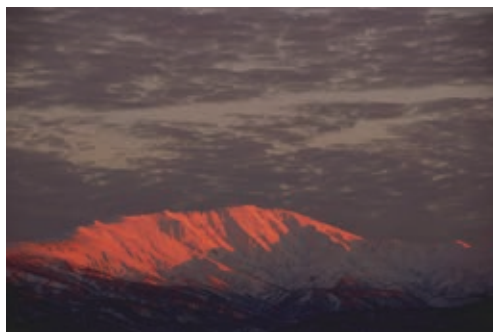


写真1 夕映えの月山

主峰の月山を中心として峰続きの北端に羽黒山があり、月山の西側には湯殿山がなだらかな稜線をえがいて連なっています。

出羽三山は古くから山岳信仰、修験道の聖地として人々の信仰を集めてきました。その信仰圏は東北地方のみならず関東一円、そして西日本にまで及んでいます。

出羽三山はその歴史の中で、さまざまな入れ代わり立ち代わりを経て現在の形になりました。中世の頃までは羽黒山・月山・葉山を三山として、湯殿山をその中でも別格の総奥の院（最も大切な場所）としていました。のちに葉山がはずれ、鳥海山が三山の一つに組み込まれた時期もありましたが、鳥海山もまたさまざまな理由からはずれて、出羽三山が現在のように羽黒山・月山・湯殿山を指すようになったのは安土桃山時代～江戸時代初

期頃と考えられています。

「出羽三山」という名称が使用されるようになったのは近代に入ってからのもので、それ以前は「羽州三山」や「奥三山」といった呼称が使われていました。

時代の流れの中で多くの変遷を遂げながらも、出羽三山は現代にいたるまで人々に篤く信仰されてきた長い歴史があるのです。

羽黒山

羽黒山は、開祖の蜂子皇子を導いた靈鳥にちなんでその名がつけられたといわれ、現在の世を生きる人々を救う観世音菩薩を祀っていたことから「現在の世を表す山」といわれています。三山のうち最も標高が低い羽黒山は出羽三山の里宮であり、羽黒派修験道（以下、羽黒修験）の総本山として現在も山伏修行が行われている場所です。



写真2 羽黒山の山伏修行（秋の峰入）

羽黒山には平安期創建の国宝羽黒山五重塔（現存する塔は室町期に再建されたもの）や、神仏習合時代の修験寺院の趣を現在に伝える三神合祭殿（現在の社殿は江戸後期に再建されたもの）など、貴重な文化財がいくつも残されています。

羽黒山頂、出羽三山神社境内の中心にあるのが鏡池（御手洗池）です。池からは平安・鎌倉・江戸中期に奉納された銅鏡が数多く出土しており、古い時代からの信仰を今に伝えてしています。その鏡池を見下ろすように建つ出羽三山神社の社殿は三神合祭殿と呼ばれ、羽黒山・月山・湯殿山の三神をあわせて祀っています。



写真3 出羽三山神社 三神合祭殿と鏡池

月山

出羽三山の主峰・月山は、高く美しいその姿から太古の昔より信仰を集めてきた山です。月山は、人が亡くなるとその魂が山に宿るという信仰に基づき祖霊が鎮まる山といわれ、同時に庄内平野の人々にとっては命を支える水を与えてくれる水分の山、農耕の山として信仰されてきました。

月山八合目にある弥陀ヶ原湿原には池塘が点在し、夏には百種類以上の高山植物が咲きほこり登山者の目を楽しませてくれます。



写真4 月山八合目に咲くニッコウキスゲ

弥陀ヶ原はかつて月山の本地仏である阿弥陀如来が祀られていたので「弥陀ヶ

原」、神様が田植えをしたといわれることから「御田ヶ原」ともいられています。八合目の御田原参籠所に隣接する月山神社中之宮御田原神社は山頂月山神社本宮の遥拝所であり、現在、稲田の守護神である奇稲田姫神が祀られています。



写真5 月山八合目 弥陀ヶ原湿原

月山八合目弥陀ヶ原から3時間ほど登ると月山山頂の月山神社本宮に到着します。

現在、本宮の祭神は『古事記』において「夜の食国を司る」とされている月読命です。羽黒山に伝わる縁起書には、月山に阿弥陀如来が現れたと書かれています。阿弥陀如来は死者の国の仏であり、月読命は夜を支配する神で、そのため月山は死者たちの住む夜の浄土といわれています。

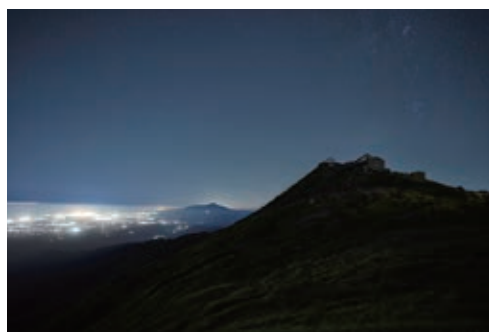


写真6 月山山頂の夜空（奥に見えるのは鳥海山の山影）

湯殿山

ブナ林に抱かれ豊かな自然が広がる湯殿山は月山の南西に連なり、その中腹の溪流のほとりに湯殿山神社が鎮座しています。

古くから出羽三山の奥の院とされ、山伏が修行の末に即身成仏（生きたまま悟り

を開く)をする場所とされ、現在でも山伏たちが修行をする行場でもあります。

神仏分離以前まで、本地仏として永遠の生命の象徴である大日如来と全てのものを産み出す山の神(大山祇命)が垂迹神として祀られたことから「未来の世を表す山」ともいわれています。

湯殿山神社の御神体は、熱湯の湧き出る茶褐色の巨大な岩です。この自然崇拝の原形をとどめた御神体については、古くから「語るなかれ、聞くなかれ」といわれてきました。江戸時代に「おくのほそ道」の旅で出羽三山を参詣した俳聖・松尾芭蕉も「語られぬ湯殿にぬらす袂かな」と句を詠むだけにとどめていることから、その神秘性を伺い知ることができます。



写真7 紅葉の湯殿山神社

出羽三山の開祖と開山伝説

羽黒山に伝わる歴史書『羽黒山縁起』によれば、出羽三山の開基は今から約1400年前、第三十二代崇峻天皇の皇子である蜂子皇子が霊鳥に導かれ羽黒山に分け入り、山中で羽黒権現を感得して山頂に寂光寺を創建したのが始まりとされています。蜂子皇子はさらに月山・湯殿山を開いて、三山の開祖となりました。

出羽三山の開祖には幾通りもの名前があり、蜂子皇子という名前のほかにも、能除太子、能除大師、能除仙、能除聖、さらに弘海という法名も持っています。「能除-」という名前の由来は、開祖が羽黒山中の阿古谷の地でひたすらに般若

心経を唱え、得られた験力で人々の病気を癒し苦悩を救ったことから般若心経の「能除一切苦(=能く一切の苦を除く)」の一節をとって、このように呼ばれるようになったといわれています。

江戸時代に描かれた開祖の尊像を見ると、獣のような鋭い眼光、肌の色は黒く、口は大きく裂け、爪は長く伸びており、常人とはかけ離れた容貌をしています。このように顔立ちがおそろしく描かれている理由は、人々の苦しみを一身に受けたため、あまりにも厳しい修行をしたため、あるいは悪霊・災いを退散させるために祈祷をする姿とも伝えられています。



写真8 「開山御尊像(蜂子皇子)」出羽三山歴史博物館蔵

羽黒修験と出羽三山—三関三渡の行

修験道とは日本古来の自然崇拝に神道や仏教、密教、陰陽道などの要素が複雑に入り混じって発展した日本独自の山岳信仰のことをいいます。修験道の行者は修験者あるいは山伏と呼ばれ、彼らは山中で厳しい修行を積むことで悟りを開き、修行で得た験力によって衆生(この世に生きているすべてのもの)を救済することを目的としていました。

羽黒修験の世界において、羽黒山は現世利益の山で「現世(現在)」を表し、月山は祖霊崇拝・極楽浄土の山で「前世(過去)」を表し、湯殿山は三山の奥の院で生命が生まれる山として「来世(未来)」を表しています。そのため羽黒山・月山・湯殿山の三山を登拝することは現世(現在)・前世(過去)・来世(未来)の

三世を渡って生まれ変わりを果たすこととされ（羽黒修験ではこれを「三関三渡の行」という）、山伏にとっては即身成仏するための大切な修行の一つでした。

出羽三山の祭祀の変遷

明治初期、明治政府による神仏分離政策によって出羽三山は神山となりましたが、もともとは神と仏が宿る神仏習合の山でした。中世からとなえられた本地垂迹説（仏様が人々を救うため神様の姿をかりて現れるという思想）に基づいて、羽黒山の本地は正観世音菩薩（羽黒山では「聖観世音菩薩」をこのように書く）、月山の本地は阿弥陀如来、葉山・鳥海山・薬師岳は薬師如来、湯殿山の本地は大日如来とされました。明治以降、三山が神道化したことで仏教要素が排され、羽黒山は稲倉魂命（伊氏波神）、月山は月読命、湯殿山では大山祇命・大己貴命・少彦名命を祭神とし、それぞれの神社に祀られるようになりました。出羽三山は時代の流れの中で地域の支配者や信仰の形態などがうつり変わり、それによって三山の祭祀も大きく変化していったのです。

山伏修行「秋の峰入」

羽黒山は平安時代より修験道の文化が根付き、江戸時代まで羽黒山寂光寺という神仏習合の修験寺院を形成していましたが、明治期の神仏分離政策によって神道化し、現在の出羽三山神社となりました。大峯山（奈良県）や英彦山（福岡県）と並んで日本三大修験道に数えられた出羽三山の羽黒修験は、現在、神仏習合時代の法灯を継承した仏式の羽黒山修験本宗（羽黒山荒澤寺正善院）と、明治期に新たに創出された神道式の羽黒派古修験道（出羽三山神社）の二派に分かれたものの、山伏修行の伝統は今日まで連綿と受け継がれています。

羽黒山には四季の峰といわれる季節ご

との山伏修行があり、毎年8月下旬から行われる「秋の峰入」もその一つです。羽黒山の秋の峰入は諸国山伏出世の行ともいわれ、羽黒山伏になるためには必ずこの修行に入峰する必要があります。

秋の峰入の修行期間は、室町時代までは75日間、室町時代末頃から35日間、明治初めには15日間、大正初めには10日間に減少し、現在はおよそ一週間となりました。羽黒修験の秋の峰入は、山に籠もり断食、勤行、南蛮燻しといった厳しい修行が行われます。修行を終えて山を出てくることを「出生」といい、これは罪穢れを持った自分は死んで、清らかで神仏に新しい力を与えられた自分として生まれてくるという意味があります。羽黒修験の秋の峰入は戦後に荒澤寺で女人禁制が解禁され、開山1400年を迎えた平成5年には、出羽三山神社で「神子修行」という女性だけの山伏修行が誕生しました。



写真9 出羽三山神社の秋の峰入



写真10 荒澤寺正善院の秋の峰入

羽黒山手向地区一宿坊と精進料理

羽黒山麓の手向地区は江戸時代から山伏たちの営む宿坊が建ち並ぶ宗教集落

で、現在も出羽三山参りの道者（参詣者）^{どうじゃ}を温かく迎え入れています。



写真11 羽黒山手向地区の宿坊（大進坊）

東北地方や新潟県、関東地方の各地で継承される出羽三山の講中は江戸時代から続くものも多く、それぞれの講中を組織する地域の人々は山伏の営む宿坊と檀家関係にあります。羽黒山ではこうした地域を「檀那場（震場）」^{だんなば かずみば}と呼んでおり、山伏は夏になると出羽三山参詣に訪れた檀那場の人々を山へ案内し、冬には山伏自らが檀那場をまわってお札を配り、同時に次の年の参詣を取りはからってもらうという慣習があります。

現代においても夏山のシーズンには白装束を身にまとった檀那場の人々が出羽三山の講中を組んで来山し、各宿坊に泊まって山伏の先達のもとに参拝を行っています。

道者は出羽三山参詣の前に精進潔斎のため、宿坊で精進料理を食べます。羽黒山の宿坊で提供される精進料理は庄内平野で実った上質な米や餅、そして出羽三山で採れた山菜がふんだんに使用されている点で京都や高野山などの精進料理とは異なった趣があります。

羽黒山の精進料理には三山の拝所や名所にちなんだ独特の名前が付けられており、例えば胡麻豆腐は、開祖である蜂子皇子の上陸伝説にちなみ「出羽の白山鳥」、月山筍の味噌汁は「月山の掛小屋」、山菜のわらびに生姜をかけたものを「羽黒修験道の柴燈」などといいます。



写真12 羽黒山の精進料理

料理に使用される山菜はあく抜きをし、長期間保存できるように塩漬け、あるいは乾燥などの加工を行います。庄内の長く厳しい冬に備え、食物を貯蔵するための先人たちの知恵と技術が、こうして精進料理の中にも生かされているのです。

羽黒山の四季の祭り

羽黒山には四季を通じてさまざまな祭りや行事があります。

主な祭りの一つに7月15日の花祭り^{はなまつ}があります。五穀豊穡、家内安全を祈願する祭りで、稲の花をかたどった造花の梵天には魔よけや豊作のお守りとして大きな霊験があるといわれています。若者衆らが御輿とともに社殿前の鏡池を一周した後、梵天を参拝客が奪い合う様子は圧巻です。

8月31日には八朔祭^{はっさくさい}が行われます。この祭りは羽黒山の秋の峰入の最中に行われるもので、8月31日の夜からはじまり、山伏が護摩壇に椿の葉を積み上げて火を放ち、夜空を焦がす勇壮な炎の祭りです。台風が訪れるこの季節に、実った稲が潰されないように風を鎮めるためといわれています。



写真13 花祭り



写真14 八朔祭

そして羽黒山の代表的な祭りとして知られているのが、大晦日から元旦にかけて行われる松例祭しょうれいさいです。

毎年9月24日に羽黒山手向地区から「松聖」と呼ばれる山伏の最高位二人が選ばれ、松聖は松例祭の行われる大晦日までの百日間を精進潔斎します。この松聖のどちらかが神意にかなったかを競い合う験競げんくらべが祭りの中心です。さらに、萱かやでツツガムシをかたどった巨大な松明を作り行われる「大松明引き」や、新年の新しい火にする「火の打ち替え神事」、山伏の「烏飛び」や「兎跳ね」など、大晦日の昼頃から元旦の未明にかけて合祭殿内や鏡池前の広場・補屋しつらえやなどでさまざまな神事が行われます。



写真15 松例祭における火の打ち替え神事

羽黒山中興の祖・天宥てんゆう

出羽三山の歴史を語る上で、大きな転換期を迎えた江戸時代初期において、羽黒山第五十代別当を務めた天宥について触れておく必要があります。

中世から近世初めにかけて諸大名の支配を受けてきた羽黒山は、地域の支配者が変わるたびに起きる混乱に振り回され

ていました。そのため、羽黒山領の独立と財政基盤の確立を目指した政治改革に着手する必要があったのです。その改革の中心となり、戦国期の争乱により衰微していた羽黒山の再興に生涯をかけて尽力した人物が、羽黒山別当の天宥です。

天宥の目指した大きな改革の一つは、出羽三山を天台宗の山に統一することでした。徳川家康が発した「修験法度（全国の修験者は本山派（天台宗・聖護院）か当山派（真言宗・三宝院）のどちらかに属さなければならないという定め）」により勢いを得た大峰・熊野の修験勢力と対抗するため、羽黒派の勢力を統合しその地位を向上させる必要がありました。天宥は徳川幕府と結びつき、幕府の帰依していた東叡山管主・天海僧正てんかいの弟子となり、当時無本寺で特定の宗旨に属さなかった羽黒山を天台宗に一山改宗し、天海の勢力を後ろ盾にさまざまな課題の解決を試みました。

天宥の働きかけの結果、出羽三山の天台宗への改宗は、羽黒山・月山のみが実現しました。湯殿山周辺にある四つの真言宗寺院は、湯殿山が弘法大師空海を開祖とする真言密教の霊山であることの矜持ろうくじゅうりと、六十里越街道（山形県の内陸と沿岸を結び、国道112号線に沿って今に残る中世からの街道）にある重要な地として庄内藩から守られていたこともあり、天台宗への改宗には最後まで応じませんでした。双方の宗教的対立はその後も続き、羽黒山と湯殿山の関係は平行線をたどりしました。



写真16 「天宥法印御真像」出羽三山歴史博物館蔵

天宥は羽黒山でさまざまな事業を行いました。今も残る羽黒山の石段参道や樹齢400年の杉並木、月山二合目から祓川につながる堰、さらに羽黒山内を流れる不動の滝（現・須賀の滝）などは、高い造園技術を持った天宥によって整備されたものです。



写真17 羽黒山の石段と杉並木

また天宥は道者を迎える宿坊の仕組みづくりにも取り組みました。当時、羽黒山手向地区には336もの宿坊がありましたが、宿坊の規定があいまいだったためお札を配る地域をめぐってのトラブルが多かったのです。天宥は担当地域を割り振った許可状を発行しました。以後山伏たちは決められた場所で布教活動を行うようになり、さらに信者を増やすため徳川家のお膝元である関東地方にも熱心に足を運ぶようになりました。こうした羽黒山伏たちの布教活動により、出羽三山信仰は東日本に広まり、西日本の熊野や九州の英彦山ひこさんとともに修験の霊山として知られるようになっていきました。



写真18 「霞之事（霞状）」いでは文化記念館蔵 山上衆徒・華蔵院へ霞場を与えた文書。

さまざまな改革で羽黒山を発展させた天宥ですが、その強引なやり方をよく思わない者も多く、山内の山伏や庄内藩との対立を生む結果となりました。天宥は不満を持つ山伏たちに訴えられ、幕府の沙汰によって寛文8（1668）年、伊豆の新島に流罪となり、同島で生涯を閉じたのです。

しかし、天宥の功績を評価し畏敬の念を抱く者も数多くいました。後の羽黒山別当たちはひそかに天宥の慰霊を行うとともに、その偉勲を後世に伝えていきました。

昭和51（1976）年には羽黒山手向地区の住民による「天宥別当墓参講」が結成され、新島での墓前祭に参加しています。昭和59（1984）年には旧羽黒町と旧新島本村との間に「友好町村」の盟約が結ばれ、今もなお交流が続けられています。



写真19 天宥別当の墓（東京都新島村）

出羽三山の八方七口はっほうななくち—湯殿山との対立

出羽三山への登り口は八方七口といわれ、神仏分離以前は羽黒口に天台宗の寂

光寺（現・出羽三山神社）、朝日地区の注連掛口には真言宗の注連寺、同・大綱口には真言宗の大日坊、肘折口には天台宗の阿吽院（神仏分離後は八幡神社）、内陸側の大井沢口には真言宗の大日寺（現・大日寺跡湯殿山神社）、本道寺口と同じく真言宗の本道寺（現・口ノ宮湯殿山神社）、そして岩根沢口に天台宗の日月寺（現・岩根沢三山神社）の七つの寺院がありました。

八方七口にある七つの寺院のうち、羽黒口は羽黒修験の集団が支配していました。肘折口の阿吽院・岩根沢口の日月寺は羽黒山の末寺（天台宗）であり、注連寺・大日坊・本道寺・大日寺の四つは湯殿山系（真言宗）寺院でした。出羽三山といっても三山が統一されたのは近代になってからのことで、明治の神仏分離以前は天台宗の羽黒山と真言宗の湯殿山、二つの宗派がそれぞれを支配していたため、その境界や道者をめぐって双方の間でトラブルや訴訟がたびたび起こりました。

湯殿山は羽黒山との差別化を図るため、弘法大師空海を開祖とする真言宗の山としての教義を一層強めていきました。山形県の庄内地方には現在六体の即身仏が祀られています。このすべてが湯殿山系の行者です。この地域になぜ多くの即身仏が存在するかについてさまざまな研究が行われていますが、その理由の一つに羽黒山との宗教的な確執と、弘法大師空海の入定伝説を宗教的信念として実践し、真言宗の山としての独自性を確立しようとしたことなどが指摘されています。

湯殿山の一世行人—即身仏となった人々

湯殿山には「一世行人」とよばれる修行専門の行者がいました。彼らは湯殿山の別当四カ寺（注連寺・大日坊・本道寺・大日寺）いずれかに入門し、出家の儀式を行うと「海号」とよばれる開祖・弘

法大師空海と同じ「海」の字が入った名をもらい、一世行人となります。そして湯殿山の行場で修行したのちに各地に分散して行人寺を建立し、民衆の教化に努めました。「即身仏」となって人々に崇められたのが、この一世行人たちです。

一世行人は一生涯を通して肉食妻帯を断ち、行屋に籠って厳しい修行に身を置きます。修行は1000日、場合によっては3000日、5000日という気の遠くなるような長期間で、その間、一世行人は木食をしながら苦行に徹します。木食というのは、五穀（稲・麦・粟・黍・豆）や十穀を断ち、カヤの実・トチの実などの木の実や草の根を食べることです。木食修行を終えると生きたまま土中に入り、石室の中で断食をしながら鉦を鳴らして読経し続けます。想像を絶する苦行ですが、これは自らの罪や穢れを消し去るとともに、飢餓や疫病による他者の苦しみを代わって受けようとする代受苦の精神といわれます。即身仏となった行人は死後、自らの体を半永久的に残し、万民を救済しようと思いました。

現在、山形県庄内地方には本明寺の本明海上人、海向寺の忠海上人と円明海上人、大日坊の真如海上人、注連寺の鉄門海上人、南岳寺の鉄竜海上人の六体の即身仏がそれぞれの寺院に祀られており、今なお人々の篤い信仰を集めています。



写真20 真如海上人を祀る湯殿山大日坊の仁王門

近代へのうつり変わり

明治2（1869）年、明治政府から神仏

判然令が伝えられると羽黒修験の総本山である羽黒山寂光寺は出羽神社と改められました（現在の出羽三山神社）。

神仏習合の廃止、神体に仏像の使用禁止、神社から仏教的要素の払拭というコンセプトから、仏像・仏具の破壊、経文を焼く、寺院の廃合、僧侶の神職への転向（復飾）などを急激に実施したために大混乱となりました。

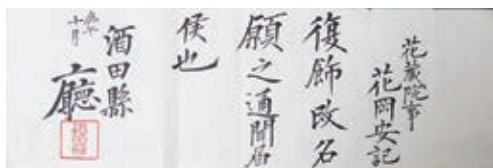


写真21 「復飾改名の許可書」いでは文化記念館蔵

神道化していった羽黒山の中でも、手向の三百余りの宿坊のうち、正善院と金剛樹院は仏教寺院として残りましたが、羽黒山の聖地は神社と寺の双方に分けられ、羽黒修験の秋の峰入も神道側と仏教側それぞれで実施されることになりました。



写真22 「三山総絵図」いでは文化記念館蔵
明治12年10月22日に発行された多色刷りの版画。

明治10（1877）年には出羽三山と鳥海山の女人禁制が解禁され、明治17（1884）年には山先達なしに出羽三山に自由に登ることが認められ、前近代における信仰登山の規制が消滅しました。

さらに大正・昭和と時代の変遷とともに鉄道や車道などの交通網が整備され、出羽三山は信仰の山としてだけでなく、

季節のレジャーを楽しむ観光地としても注目されていくようになりました。

いでは文化記念館がオープン

昭和中期以降、出羽三山は観光地としての人気が高まる一方で、本来の信仰の山としての認識が薄れはじめていることが懸念されていました。

「いでは文化記念館」は、来館者に出羽三山の歴史や文化を学んでほしいという地元の人々の思いから平成3（1991）年に誕生した施設です。出羽三山の四季の行事や羽黒修験に関する資料を展示しており、出羽三山の魅力を伝えるさまざまな事業に取り組んでいます。

館内の常設展示室では、出羽三山信仰に関する資料をはじめ、平成28（2016）年に文化庁の日本遺産に認定された「出羽三山生まれ変わりの旅」を紹介する展示ブースなどがあり、資料や映像を通して出羽三山についてわかりやすく学ぶことができます。



写真23 いでは文化記念館の館内展示

現在は新型コロナウイルス感染拡大防止のため休止中ですが、山伏のほら貝を吹くことができるほら貝体験も人気です。

当館では幅広い世代の方に興味を持っていただけるような企画展や子供向けワークショップ、クイズラリーなどを開催し、楽しく学びながら出羽三山の魅力を知っていただけるよう心がけています。



写真24 子供向けワークショップの様子

羽黒町観光協会の主な事業

いでは文化記念館内に事務所を構える「羽黒町観光協会」は、昭和56（1981）年6月に設立され、出羽三山神社をはじめ鶴岡市、羽黒地域内の企業、宿坊・旅館、商店など正会員と地域外の準会員とで構成される任意団体です。最も身近で地域に密着した単位協会として、羽黒地域の観光振興並びに地域の活性化を目的に各種事業に取り組んでいます。

羽黒町観光協会の主な事業の一つに、「国宝羽黒山五重塔ライトアップ」があります。平成25（2013）年から行っている本事業は、石段の入り口である随神門から五重塔までの参道を光で照らし、夜間参拝できるようにしています。漆黒の闇の中に浮かび上がる五重塔の姿は幻想的な雰囲気を醸し出しています。

令和5（2023）年から令和7（2025）年にかけて羽黒山五重塔の屋根の改修工事が行われるため、残念ながら二年の間ライトアップ事業は休止となりますが、ぜひ一度ご覧いただければと思います。



写真25 国宝羽黒山五重塔ライトアップ

もう一つ羽黒町観光協会の大きな事業に「山伏修行体験塾」があります。

山伏修行体験塾は、白装束を身にまとい、俗世界から離れて修行の一端を体験し出羽三山の自然、そして修験道を学びます。本事業では、山伏修行をしたい方の入門編として日帰りから2泊3日までの短期間で行っています。

本事業は羽黒地域手向地区在住の山伏を先達（講師）に実施、体験内容は羽黒修験道の修行から抜粋しています。近年は体験希望者が増加し、令和元（2019）年は8団体708名と個人50名の758名が参加しています。団体は、小中学校の体験学習として県内はもとより宮城県の学校、慶応義塾大学のセミナー、企業の経営者団体などの参加があります。個人での参加者は、北は東北各地から南は福岡までと全国各地から集まっており、年齢層も下は10代から上は70代までと幅広く、3回以上リピートする参加者も増えています。また、本事業の山伏体験をきっかけに出羽三山神社や荒澤寺正善院の「秋の峰入」に参加する方もおり、羽黒修験道の裾野を広げる役割も担っています。

これまで出羽三山参詣の主流を占めていた出羽三山講が参加者の高齢化に伴い縮小傾向にあることから、新たな取り組みとして企業研修などにこの修行体験を活用してもらい、将来的には研修の参加者に出羽三山詣をしていただけるように繋げて行ければと思っています。



写真26 山伏修行体験塾

おわりに

時代の変遷とともに、出羽三山を取り巻く状況も変わりつつあります。

羽黒山の手向地区では、住民の高齢化や少子化、そして後継者不足の問題が年々深刻化しています。手向地区では一年を通して出羽三山信仰に基づく伝統行事が行われていますが、祭を担う若者（後継者）が減少していることで行事の開催自体、今後できなくなるのではという懸念もあります。

そうした中で、いでは文化記念館および羽黒町観光協会は手向地区における後継者（担い手となる移住者）の育成・創出を目指し、地域活性化に向けたイベントや企画の実施に取り組んできました。近年は手向地区自治振興会と共に、廃校になった旧羽黒第一小学校を活用した「手向春祭り」を開催し、山伏による案内のもと、地域の歴史を知る町歩きイベントを行いました。



写真27 「手向春祭り」の開催

連休中など多くの人が集まる期間には、羽黒山を知る体験プログラムとして山伏が身につける「宝冠巻き体験」や「羽黒山石段ガイド」などを開催しました。いずれも好評で多くの方に足を運んでいただきましたが、そのにぎわいはどうしても一過性のものになりがちです。地域を担う後継者や移住者を育成・創出するというワンランク上の目標のためには、定期的なイベント開催のほかに、移住希望者を受け入れる環境や体制を地域全体でしっかりと整えていく必要があります。まだまだ多くの課題があり、地域

住民の中だけでなく自治体と連携した持続的な活動が求められるところです。

令和2（2020）年には、東京の建設会社による出羽三山周辺の大規模風力発電事業の建設計画が立ち上がりました。

開山1400年の歴史を持つ山岳信仰の聖地に大型風車群はふさわしくないこと、また三山の自然、文化、環境を破壊することへの懸念から羽黒町観光協会は地元山伏と住民たちによって立ち上げられた「出羽三山の風車建設に反対する会」の事務局となり、計画中止を求める署名活動を開始しました。

署名活動から約一ヵ月で14,157人の反対署名が集まり、事業者からは反対運動に対する理解をいただいたことにより、建設計画は白紙撤回となりました。短期間でこれだけの署名が集まったことに大きな驚きがありましたが、反対署名に賛同してくださったのが出羽三山信仰の檀那場地域や、秋の峰入に参加している全国の羽黒山伏など出羽三山にゆかりのある多くの方々だったことがわかり、改めて出羽三山信仰の影響の大きさを実感する出来事となりました。



写真28 羽黒山大鳥居前からの風車群建設イメージ

近年はコロナ禍により、参詣者及び観光客の減少で出羽三山は再び厳しい状況を迎えています。今もなお多くの課題がありますが、さまざまな方に出羽三山に興味を持っていただき、さらに好きになるきっかけづくりができるよう、今後も「いでは文化記念館（羽黒町観光協会）」は地域の方々と共に出羽三山の魅力を多角的に伝え、発信できる施設でありたいと思っています。



写真29 羽黒山大鳥居と月山

令和5（2023）年は月山の卯歳御縁年です。出羽三山にはそれぞれ御縁年の年（開山の干支にあたる年）に登るとご利益があるという言い伝えがあります。月山は卯歳、湯殿山は丑歳、羽黒山は午歳です。

月山の御縁年については、欽明8年（547年）の卯歳に月山神がその姿を現したという故事に由来しています。

12年に一度の特別な年に、月山へのご参拝はいかがでしょうか。雄大な出羽三山の自然、庄内地方の豊かな食文化、そして今日まで連綿と継承されてきた山岳信仰の精神文化にぜひ現地で触れていただければ幸いです。皆様のお越しをお待ちしております。

【主な参考文献】

- ・戸川安章『新版 出羽三山修験道の研究』（佼成出版社、1986）
- ・阿部正己『出羽三山史』（阿部久書店、1986）
- ・羽黒町史編纂委員会『羽黒町史』上下巻（羽黒町、1991）
- ・宮家準『羽黒修験 その歴史と峰入』（岩田書院、2000）
- ・島津弘海・北村皆雄編『千年の修験 羽黒山伏の世界』（新宿書房、2005）
- ・鈴木正崇『山岳信仰 日本文化の根底を探る』（中公新書、2015）
- ・岩鼻通明『出羽三山 山岳信仰の歴史を歩く』（岩波新書、2017）